

〈近代本論第十九回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1792 ロシア遣日使節アダム・ラクスマン根室に来航
- 1802 勝小吉（～1850）中流旗本男谷平蔵の三男（妾腹）として深川油堀に生まれる
- 1804 ニコライ・レザノフ長崎来航、幕府通称拒否（定信は既に失脚）
- 1808 イギリス軍艦フェートン号、長崎出島に侵入（フェートン号事件）
- 1815 勝小吉江戸出奔、乞食をしながらお伊勢参り
- 1822 勝小吉再び江戸出奔、剣術を教えながら諸国を回る 江戸帰府後、父親から三年間座敷牢に入れられる
- 1823 勝麟太郎（海舟）誕生（～1899）
- 1825 異国船打払令
- 1825 岩倉具視誕生（～1883）公卿堀河家の子息として、後に中級公家の岩倉家の養子となった
- 1828 西郷隆盛誕生（～1877）薩摩藩下級藩士の子
- 1833 桂小五郎（木戸孝允）誕生（～1877）中級藩士の子、後に桂家の末期養子になった（七歳）。木戸姓は小五郎が藩の実権を握った1865頃、藩主が賜った姓である
- 1835 福沢諭吉誕生（～1901）中津藩士福沢百助次男、百助は大坂で藩債処理にあたった下級武士だった
- 1839 〈蚕社の獄〉 渡辺崋山、高野長英の死
- 1840～42 アヘン戦争（→南京条約）
- 1841 田中正造（～1913）下野国阿蘇郡小中村の名主の家に生まれた。彼も若くして名主を継いでいる。小中村は〈高家〉（儀礼関係に職能化した格式のある）の旗本六角家に属していた
- 1841 伊藤博文（～1909）百姓の子として周防国に生まれる。父が足軽身分となったため、下級武士となった
- 1843頃 『夢酔独言』家訓書として執筆される
- 1845 勝海舟、蘭学の修業を始める（二十三歳）
- 1849 桂小五郎、吉田松陰の門下生となる（十七歳）
- 1850 勝海舟、私塾を開き蘭書を講じる（二十八歳）
- 1850 お由羅騒動（島津久光派 ⇄ 島津斉彬派）、西郷、大久保は当初から斉彬派であった（→ 精忠組へ）

- 1851 島津斉彬（1809～58）薩摩藩襲封^{しゅうほう}
- 1852 桂小五郎 剣道修業のため江戸留学を藩に願い出て許される 江戸三代道場の一つ、斎藤弥九郎の〈練兵館〉で免許皆伝を受け、塾頭となる
- 1853（1月）岩倉具視、関白家で歌道修業を開始（二十三歳）、下級公家でありながら宮中政治への参画の可能性を得た
- 1853（7月8日）海軍提督マシュー・ペリー率いるアメリカ海軍東インド艦隊（二隻の外輪式蒸気船、二隻の帆船）が浦賀に来航
- 1854（2月11日）ペリー再来航（蒸気船三隻、帆船三隻）
- 1854（3月31日）日米和親条約（神奈川条約）締結、6月、下田条約（和親条約の細則）締結、下田、箱館（函館）の開港、鎖国の終焉
- 1854（4月）西郷隆盛、島津斉彬の〈御庭方役〉（近習連絡役）となる → 公武合体論、慶喜後嗣問題に参加。この時期の西郷は尊皇攘夷派であった
- 1855（7月）勝海舟、長崎の海軍伝習所へ
- 1856（6月28日）アロー号事件
- 1856（8月）タウンゼント・ハリス、アメリカ公使として下田に着任
- 1856～69 アロー戦争＝第二次アヘン戦争（→天津条約）
- 1857（八月）老中首座阿部正弘急死、堀田正睦老中首座に、条約勅許運動開始
- 1857（12月）ハリス江戸入府、江戸城登城
- 1858（3月）堀田正睦の条約勅許使の入洛に際し、岩倉具視ら公家は集団で参内して勅許の不許可を求めた（〈廷臣八十八卿列参事件〉）孝明天皇はそれによって勅許を与えないこと決定した。堀田正睦は失脚し、井伊直弼が大老となる。勅許なしの条約締結に踏み切る
- 1858（6月19日）日米修好通商条約締結 領事裁判権（治外法権）、関税自主権の剥奪（段階的に行われた）、片務的最恵国待遇（これも事後的に確定）等、やや曖昧な形で出発したものの、典型的な不平等条約として定着した
- 1858（7月10日）日蘭修好通商条約、不平等条約
- 1858（7月11日）日露修好通商条約、不平等条約
- 1858（7月18日）日英修好通商条約、不平等条約
- 1858（9月3日）日仏修好通商条約、不平等条約、以上〈安政五カ国条約〉
- 1858～59 安政の大獄（吉田松陰、橋本左内他斬罪刑死）
- 1858（11月）西郷隆盛、尊皇志士の僧月照と入水自殺をはかる。月照は死亡、西郷は蘇生
- 1859～62 西郷隆盛、奄美大島へ流罪（これは井伊大老派の探索捕縛を避ける意味もあった）
- 1860 日本の蒸気船軍艦咸臨丸渡米（勝海舟、福沢諭吉）
- 1860 桜田門外の変 井伊大老暗殺
- 1861（11月）和宮降嫁（孝明天皇異母妹） → 第十四代将軍家茂正室 = 公武合体の象徴

- 1862 (4月) 島津久光上洛、公武合体、雄藩連合の主導を建て前として、藩兵千名を率いての初めての上洛は力の誇示であった。西郷が奄美から呼び戻されたのも、京都で折衝にあたらせるためである。西郷は当初反対したが、結局同行した
- 1862 (5月21日) 寺田屋事件 島津久光による薩摩尊皇派の粛清
- 1862～1864 西郷の二度目の流刑。久光が西郷による攘夷派の煽動を疑ったため。今度の流刑は重罪人扱いの遠島流刑(大島、沖永良部島)であった。牢屋から島民に孟子を講義した
- 1862 (9月) 生麦事件
- 1863 (5月) 伊藤博文、井上聞多(馨)ら、英国留学(〈長州五傑〉)二人は翌年三月、下関戦争仲介のため急遽帰国した
- 1863 (8月) 薩英戦争
- 1863 (8月18日) 〈八月十八日の政変〉 攘夷委任派(幕府、薩摩)の勝利、攘夷親征派(長州、急進公家)の敗北 → 七卿落ち
- 1863～64 下関戦争(馬関戦争)
- 1864 (3月) 西郷の赦免召還 久光は京都で公武合体運動を続けたが、人脈も少なく交渉が思うほど進捗しないので、西郷を呼び戻さざるをえなかった
- 1864 (6月5日) 池田屋事件 長州、土佐の尊皇攘夷派志士を新撰組が襲撃。桂小五郎(木戸孝允)は会合到着が遅れ九死に一生を得た
- 1864 (7月18日) 禁門の変(蛤御門の変)〈錦旗〉(孝明天皇)奪取を目論む長州勢と会津、薩摩藩士との白兵戦 西郷は薩摩兵を率いて蛤御門を死守し、これ以降、実質勤王方の参謀としての地位についた。西郷があくまで禁裏保護のための防戦を標榜し、势力的には中立を保ったこともきわめて注目に値する
- 1864 (9月) 大坂にて勝と西郷の対談(初対面)、勝は幕府の内情を伝えた
- 1864 (7月～11月) 第一次長州征伐(西郷隆盛、征長軍参謀に任ぜられる) 長州藩、謝罪して禁門の変の責任者に自刃を命じた
- 1866 (1月22日) 薩長同盟成立
- 1866 第二次長州征伐 幕府軍の敗北(⇨奇兵隊の活躍)
- 1867～68 田中正造、〈六角家弘奸闘争〉を指導、名主の自治権を奪おうとする側用人との闘争だった。拷問され投獄されるが、闘争には勝利した。しかし家産を傾けての義民的闘争だったため、無一文となる
- 1867 (5月21日) 倒幕を目指す薩土密約成立 乾退助(板垣退助)と西郷隆盛の戊辰戦争での指揮権はこの密約を背景としている
- 1867 (6月22日) 坂本龍馬の仲介により、薩土盟約成立。後藤象二郎、西郷隆盛参加。こちらは平和裡の大政奉還を目指したものだ。西郷の和平、抗戦の二重方針が維新の基軸を決めていくことになった。
- 1867 (10月) 大政奉還
- 1867 (12月9日) 王政復古

- 1868 (1月) 鳥羽伏見の戦い、旧幕府軍、圧倒的兵力差にもかかわらず薩長連合軍 (薩土密約をうけ土佐藩士も参加) に敗北
- 1868~69 戊辰戦争
- 1868 (3月) 江戸城無血開城 (勝、西郷、山岡鉄舟)
- 1868 (3月) 五箇条の誓文
- 1869 (5月) 箱館戦争、五稜郭落城
- 1869 (6月) 版籍奉還 諸藩の土地 (版) 戸籍 (籍) の朝廷への献上、幕藩体制の実質的な終焉
- 1870~74 田中正造、新政府の地方官吏として疑獄事件に巻き込まれ投獄、再び拷問を受けた
- 1870 (6月) 神田孝平〈田租改正建議〉提出 → 地租改正原案
- 1870~72 〈四民平等〉の基本政策実施 (平民の苗字許可、華族、士族との通婚許可、国民皆学制度)
- 1870~71 普仏戦争 → ドイツ帝国成立 (71年1月)
- 1871 (8月) 廃藩置県 府藩県の混在を統一して、集権化を開始した
- 1871 (11月12日) 岩倉使節団 (米欧回覧使節団) 出発
- 1873 (9月13日) 岩倉使節団帰国 (これより先、大久保利通は5月に、木戸孝允は7月に帰朝していた)
- 1873 (10月) 征韓派の敗北、西郷、板垣、江藤新平等の下野、大久保利通実権を握る → 内務卿独裁の開始
- 1874 (1月) 民撰議院設立建白書
- 1874 (2月~3月) 佐賀の乱、江藤新平処刑 (4月)
- 1874 (5月) 台湾出兵、木戸、出兵に抗議して参議を辞職
- 1875 (2月) 大阪会議 → 板垣、木戸の政府復帰、立憲政体漸立の合意
- 1875 (4月) 漸次立憲政体確立の詔勅 (立憲の最初の宣言)
- 1875 (6月) 讒謗律、新聞紙条例
- 1875 (10月) 板垣参議を辞職、木戸も政府を去る、大阪会議合意の破綻
- 1876 (8月) 秩禄処分 封建的家禄の全廃、代償としての国債贈与 華族クラスの上位者は金融ブルジョワへと変容し、中士、下士クラスは〈士族の商法〉によって没落していった
- 1877 西南戦争
- 1878 田中正造、栃木県区会議員として政治活動を開始する

2. 人間的定位の基本原理

- 定位は人間種の全体世界に対する時空定位である
- 人間種の全体世界は、神 (超越)、自然、社会 (集団) によって構造化される
- この最後の〈社会〉は、個と集団の弁証法を内在させている (超越と自然に対しては、この弁証法は本来存在しない)
- 道具系は社会の下部構造基盤に組み込まれた操作組織を原点とした

- この道具系の自立的肥大化が、人間的定位の古典的バランスを崩す趨勢を示す、これが人類種の基本問題を生み続ける（第一革命、第二革命の現実）
- 定位は法に帰結する（第一革命における世界宗教、第二革命における法治国家）
- この法もまた、道具系の自立化と弁証法的緊張関係に入る（われわれの現状）
- 法の原理を道具系全体に拡張できるか否かが、人類種の最終的な定位形態を決定するだろう（定位哲学予測）

3. 近代的定位の基本原理

- 近代的定位は、個我の合理主義が自然を資源化したところから開始した
- その際、神（超越）は個我の〈考えるわれ〉の根拠となるか（理神論）、括弧入れによってひとまず姿を消した（反動としての〈欺く神〉）
- 超越神を持たない世界（東洋世界）においては、超越は社会的超越としてか（聖人の〈道徳政治〉）、自然内的超越（アニミズム的八百万の自然神）としての長い伝統を持っていた
- この超越が近代的個我とどう融合するのかは、いまだに進行中の定位課題である（一つの試行としての賢治の実存）
- いずれにせよしかし、超越、自然、社会の基本的範疇は、前近代においても、近代においても（ヨーロッパ的近代においても、日本の近代においても）一貫した構造的原理である

4. 志士の定位の基本原理

- 近代的定位の基本は、個我の先導性だった（合理主義の貫徹は個我から集団の再構成へと向かう）
- この定位力学が〈文明化イデオロギー〉の席卷によって崩れる
- 〈軍艦外交（植民地主義、人種主義）〉の主役たちは、範疇化したイデオロギー主体であって、もはや本来の近代的個我（合理主義的主体）ではない
- 幕末のイデオロギー的沸騰（尊皇⇄佐幕、攘夷⇄開国）は、〈文明〉をめぐるものではなく、〈国家統一〉をめぐる、実体的な政経構築のプランニングを内実としていた（形而上的プランニング）
- そのイデオロギーは、〈志士〉たちの実存を浸食することはなかった（木戸、岩倉の例）
- 〈志士〉たちの定位は、近代においては例外的に（十九世紀においては例外的に）個我の内奥（実存的基底）において、行動主義的基調と共に進行する
- これが維新的〈一身二生〉の定位パノラマを生む原動力となった
- したがって、志士の実存に焦点をあてた定位解析が、この動乱期の定位内実を照らし出す正しい方法となる
- それは実存的（個別的、偶有的）であり、かつ範疇的である（社会的範疇性を示す）

- その根本の原因は、彼らの実存が、経世への意欲において、社会（集団）と当初から連結されていたからである
- その前提としての、幕末社会のネットワーク形成（私塾と剣道場と下級武士）
- 彼らの実存はその内奥において社会的実存であり、それが〈志士〉の定位世界を近代日本草創の原風景として確認できる根拠となる
- 実存分析は、この場合（のみ？）範疇分析（社会的定位構造の解析）となる

5. 幕末維新の定位特性としての〈一身二生〉（福沢諭吉）

- 封建日本と開化の日本の並存（引用1）
- 維新の対位法
- ストレッタ的ハイライト（重合）
- 明治的ポリフォニーの前提

引用1

〈試みに見よ、方今我国の洋学者流、その前年（※前半生）は悉皆漢書生ならざるはなし。悉皆神仏者ならざるはなし、封建の士族にあらざれば封建の民なり。あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し。〉（福沢諭吉『文明論之概略』（緒言）、12p）

6. 江戸期に用意された多元的定位は、平準化の原理を内包していた

- 主体的、多元的であった定位型（心学、儒学、国学、蘭学）（第二章）
- 階級平準化の原理がそれぞれの定位型に働いていた
- 無階級性、あるいは階級混淆性は心学において著しい
- 階級の閉鎖性（豪農、豪商への限定）を示す国学も、定位同胞の内部では著しい平準性を示した
- 『夜明け前』の青山半蔵の例
- 国学ネットワークの地方ハブとしての自覚（引用2）

引用2

〈半蔵の周囲には、驚くばかり急激な勢いで、平田派の学問が伊那地方の人たちの間に伝播し始めた。飯田の在の伴野と言う村には、五十歳を迎えてから先師没後の門人に加わり、婦人ながらに勤王の運動に身を投じようとする松尾多勢子（※後に岩倉具視の右腕として活躍する）のような人も出て来た。おまけに、江戸には篤胤大人の祖述者をもって任ずる平田鉄胤のようなよい相続者があって、地方にある門人らを指導することを忘れていなかった……半蔵にして見ると、彼はこの伊那地方の人たちを東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見いだしたのである。〉（島崎藤村『夜明け前』第一部、1-212pf）

7. 幕末的定位の特性 → 定位類型の近接、重合
- 多元的定位はそれ自体、並存し、また重合することもあった
 - 心学、蘭学における儒学的素養等
 - 儒学、国学は重合、近接が希薄で自尊的、自閉的であった
 - 幕末維新期にはすべての定位類型が近接し、重合する
 - そこには同盟的結合も見られた
 - 〈蛮社の獄〉(1839年)における儒学と国学の共闘等
 - 青山半蔵も漢学(儒学)の素養から、国学に進んでいる
8. 天保の改革の帰趨が、定位類型をイデオロギー化していった
- 幕府において失敗、雄藩において成功
 - 幕府は改革の財政基盤を持たないまま維新期の動乱を迎えた
 - 雄藩は財政基盤を立て直すと同時に、その立て直しの企画者であった〈有司〉のグループを育てた(木戸、大久保、後藤たち)
 - 危機意識の共有(アヘン戦争)により、定位類型のイデオロギー化が始まった
 - 黒船来航、条約締結(無勅許締結)がその過程を加速する
 - 尊皇(勤王)、佐幕、攘夷、開国の幕末四大イデオロギーが出揃う
9. 幕末イデオロギーの戦士となった志士たち
- イデオロギー内実ではなく、その行動形式を支えたエートスに注目
 - そのエートスを育てたものは、特異な社会ネットワークである
 - そのネットワークには三つのハブが存在した
 - ① 私塾、② 剣道場、③ 不良旗本(困窮下士)
 - 生活の困窮から、下士は身分制の保護を離脱した
 - 生活の再構築のために、下士は階級混淆的な〈人生の知恵〉を身に付けた
 - 雄藩における〈有司〉、幕府における〈名奉行〉の背景
 - 〈名奉行〉はかつて〈不良旗本〉として有名だった(長谷川平蔵、遠山景元 → 勝小吉、海舟父子の系譜)
 - 社会ネットワークとハブの多彩さ、強靱さが幕末を特異に主体的な動乱期とした真の背景である
 - 志士とは私塾で世界観を磨き、自らの困窮において無階級的な感性を獲得し、剣道場で〈人士〉となることによって、他の〈人士〉を知り、〈時勢〉に対する〈見識〉を涵養する、そういう存在だった
10. 私塾のハブ機能
- 官学、藩校に対立するものではなく、むしろ補完的
 - 〈松下村塾〉は藩校〈明倫館〉と補完的な位置にあった

- しかし藩校は上士、中士までに限定される場合が多く、私塾の階級開放性は、やはり〈草莽〉へのイデオロギー拡張において、重要な機能を果たした
- 松下村塾における伊藤博文、山縣狂助（有朋）の例（農民、足軽出自）
- 名主であった田中正造も郷里の漢学私塾で、漢文、儒学の基礎を学んでいる

1 1. ハブの活用における薩長の対比

- 桂小五郎（木戸孝允）が、ハブの活用における、代表的な志士である
- 私塾（松下村塾）、下士の活用（伊藤、山縣）、剣道場（練兵館）
- 長州藩は、幕末ハブの活用において範例的だった
- 標準タイプの志士を輩出した背景
- 薩摩においては〈剣道場〉のハブ機能は存在しなかった
- 薩摩の剣法（示現流）の藩内限定性
- 西郷も大久保も剣道には打ち込んでいない
- 〈見識〉も名君（斉彬）から直接移植されたものだった
- 海外に対する視野はしかし、重豪、斉彬が早く、その分、大久保や西郷もマクロの国際的視野は保持している
- 長州においては〈蘭癖〉のある藩主はいなかったため、海外への視野は松蔭の密航失敗によって頓挫した。〈長州五傑〉の留学成果が生きるのは明治になってからである

1 2. 志士の人格形成の範疇的特性

- イデオロギーにおける平準性、無階級性（無藩閥性）、連合性（藩力学の飛び越え）
- 雄藩有司としての能吏体験（プロト近代官僚制体験）
- 藩内体験（出自を含む）の固有性
- 明治期の藩閥形成の背景はかなり複雑である
- 伊藤と山縣の差異の淵源は何かを考えてみること
（伊藤は藩力学を早く超越し、山縣は長州陸軍閥の大物として君臨した）

1 3. 剣豪志士桂小五郎の自己形成

- 下級藩士の養子、しかし実父から遺産相続で富裕に
- 富裕故の出世を嫌い、剣道に打ち込む
- 剣道修行のため江戸留学を願い出て許される（1852年）
- 幕末三大道場の一つ〈練兵館〉（斎藤弥九郎主宰）で頭角を現し、一年ほどで塾頭を務める
- 幕末の剣豪として名を馳せ、志士としての知名度を上げていく
- この剣道場を通じての〈人士〉の育成は、藩是でもあった
- 坂本龍馬も剣道修行のため江戸留学、小千葉道場に入門している

1 4. 江戸剣道場のハブ機能

- 木戸や坂本は例外ではなく、江戸の剣道場は志士たちのネットワーク形成に大きな役割を果たした
- 剣道で知名度を上げ、学問（私塾）でイデオロギー形成に励み、〈人士〉としてのネットワークに参加することで、志士のキャリアそのものが始まる
- 江戸遊学の強い志向性を志士たちは共有していた（中岡真之介、江藤新平他）

1 5. 剣道場のハブ機能における薩摩の孤立性

- 江戸遊学の志向性そのものが希薄だった
- ネットワーク形成における剣道場の活用も見られない
（剣道に疎かった西郷、大久保）
- 薩摩の特異な剣法〈示現流〉は〈御留流〉として、藩外への流出を禁止されていた

1 6. 幕末の剣道概観 → 二期の隆盛

- 前期 → 〈天保三剣士〉
- 後期 → 幕末江戸三道場

1 7. 前期の隆盛——〈天保三剣士〉

- ① 男谷信友（1798～1864）
- ② 島田虎之助（1814～1852）
- ③ 大石進（種次 1797～1863）
- 三名ともに藩士、幕臣の出身 → 後期にはこの定型が崩れる
- しかし彼らの履歴はすでに階級混淆的（門閥平準的）
- 地方小藩の出自で、御前試合で出世した大石進
- 島田も地方での武者修行を経て江戸に乗り込んでいる

1 8. 〈天保三剣士〉のネットワーク形成の中心には男谷信友がいた

- 江戸に来た大石、島田と手合わせをした後、各方面に推薦してキャリアの形成を助けた
- 男谷は勝小吉、海舟の本家で、もともとは男谷検校の裔
- 検校は行き倒れ寸前の地方を出奔した若者で、恵まれた小金をもとに高利貸しを始め、大成功して検校になり、息子たちのために旗本株を買った
- このキャリア自体が階級の混淆を如実に示している
- 男谷家はこの信友から〈剣道の家〉として有名になった
- 信友が世話をした島田虎之助は勝小吉の友人であり、海舟の剣道の師となっている
- 剣道界のフィクサーとしての信友は、幕末のハブ道場の先駆者と言える

19. 幕末の武道（剣道）流行

- 男谷信友は〈講武所〉の設立にも関係した（1854年）
- 全国的な武道流行のはしり
- 近藤勇や土方歳三の剣道による社会的上昇
- 〈武張った〉世の中の出現
- 刀を質に入れる困窮下士と、武道を習う庄屋衆（『夜明け前』）（引用3）
- 貨幣経済の進行と階級混淆の連動

引用3

〈武士が刀を質に入れて、庄屋の衆が弓をはじめめるか。世の中も変わりましたね。〉（藤村『夜明け前』、第一部、1-236p）

20. 幕末江戸三大道場 → ハブ形成の本格化

- ① 士学館：鏡新明智流 1773開設 初代桃井直由 四代桃井直正（1825～85）直正の時に盛んになり、三大道場の一つに数えられた、武市瑞山、岡田以蔵の入門
- ② 玄武館：北辰一刀流 1822開設 千葉周作（1793～1856）周作は獣医（馬医）浪人の子、江戸道場の成功の後、水戸斉昭に招かれて水戸藩の剣術師範を勤めている、剣道によって士分を獲得していくケースである 清河八郎、山岡鉄舟が入門
- ③ 練兵館：神道無念流 1826開設 斎藤弥九郎（1798～1871）長州藩が高く評価したため、桂小五郎、高杉晋作、井上聞多、伊藤博文の入門が続いた

21. 斎藤弥九郎に見られる階級混淆性

- 農民の子、丁稚奉公がうまくいかず、親から路銀だけもらって江戸へ
- 旗本の下男となり、仕事と読書にはげむ
- 感心した主人が剣道、儒学、砲術の修業を助ける
- 大道場で師範代を勤めるまでになり、同門の江川英龍（1801～1855）の援助で練兵館を開館した
- 江川は老中阿部正弘が見いだした優れた経世家であり、その手助けをしながら、弥九郎も志士的な活動に入ることになる
- 息子が諸国遍歴で名をあげ、そちらの縁で長州藩が練兵館を〈江戸遊学〉の拠点として選ぶ
- 桂小五郎ら長州藩の志士が多く入門

22. 幕末軍事の階級混淆性 → 国民軍創設前夜

- 〈奇兵隊〉の範例性（高杉晋作、大村益次郎）
- 攘夷家清河八郎（1830～63）の〈浪士組〉結成
- 將軍家茂の上洛の警備を口実に（〈急務三策〉）
- 京都で尊皇攘夷の旗揚げ
- 佐幕分派（壬生浪士組）は〈新撰組〉に

23. 剣道による社会的上昇のアンビバレンツ

- ハブ機能の全階級性 ⇔ 獲得した士分に対するこだわり
- 後者の典型例は〈新撰組〉
- 千葉道場（〈玄武館〉）においても、上士の道場と下士の道場は区分（龍馬は後者の小千葉道場で修業した）
- テロリストへの退行
- 岡田以蔵（〈人斬り以蔵〉1838～65）、河上彦斎（1834～72）
- 士農工商の細分化原理は、内部増殖をして門閥を形成する
- 反動的〈士分〉獲得組は、互いに序列争いを繰り広げた
- 〈有司専制〉、〈藩閥政府〉の強権派にも見られる封建的反動性

24. 士農工商の内部に組み込まれた階級の平準化原理

- 士農工商は〈家制度〉の存続を建て前としていた
- そのため特に士分で養子縁組が常態化した（家を絶やすと禄が消えるため）（勝小吉、桂小五郎、福沢諭吉他）
- それは家督を相続できない次男以下の〈生計の手段〉でもあった
- これに加えて、士分の〈株〉の売買がある（旗本株、御家人株等）
- もう一つの制度は〈隠居〉であり、これをうまく用いると〈楽隠居〉として、身分的拘束をある程度離れた生活（無階級の自由生活）が可能になった
- 養子縁組みと隠居は、身分制度の拘束と桎梏に対する緩衝材として機能した
- この二つが公認の制度であったことは、庄屋、名主の場合、隠居が上司格の役人の認証を必要としたことに現れている

25. 幕末的デラシネ性は〈不良旗本〉において極まった

- 彼らの〈楽隠居〉は、一生の無益を悟らせる機縁となる
- 勝小吉（1802～50）の『夢酔独言』（引用4）
- 志士の自己解放がかなわなかった封建的屈折の典型
- しかしそこにおいて無階級的なハブ機能は最大値を示した
- 〈不良旗本〉と〈困窮下士〉のデラシネ性は、志士の心性の基底部を形成していくことになる
- 幕末的デラシネの典型としての勝小吉

引用4

〈おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有るまいとおもふ。故に孫やひこ（※ひ孫）のために、はなしてきかせるが、能々不法もの、馬鹿者のいましめにするがいいぜ。〉（勝小吉、『夢酔独言』11p）

26. 〈不良旗本〉の系譜

- 三河徳川氏の中核家臣団 → 旗本八万騎（小者、親族を含めて、中核は五～六千の軍事集団）
- 幕府軍制の中核として尚武を義務づけられる
- 生活負担＋太平の世で形骸化
- 自己顕示的ストレス発散 → 江戸初期の〈旗本奴〉 → 処罰対象に
- 幕末に下層旗本（小普請組等）の生活苦から不良旗本の大量発生
- 勝小吉は派手な生活が祟り、天保の改革の奢侈禁止令にひっかかって隠居謹慎を命じられた（1838年）
- それより先、楽隠居を願って兄から止められている
- 就職活動をやってみたが、不良の評判がたたり成功しなかった

27. 〈不良旗本〉の剣道熱

- 勝小吉は養家とうまくいかず、家出してお伊勢参りをした（十四歳）
- 青年期になると剣道に熱中する
- 実家（男谷家）は信友以来剣の家として名を馳せていた
- 剣道の勝負では一瞬階級差（門閥差）が無化された
- 上役の息子を「たたきちらした」逸話（引用5）
- 強くなると子分ができる → 親分として振る舞ううちに借金苦
- 踏み倒して出奔（二十一歳）
- 諸国巡りの「剣客」として生きる夢（引用6）
- これはすでに大石進や島田虎之助が実例を示していた
- 水戸の藩士をかたって、宿の待遇を上げさせる
- 途中で江戸に帰り、実父から座敷牢に入れられる

引用5

〈其稽古場へ、おれが頭の（※勝家は小普請組という最下層の臨時職の一員で、その頭の）石川右近将監のむすこがいでしが、おれの高（※勝家の石高）や何かを能知っている故、大勢の中で、「おれが高はいくらだ、四十俵では小給者だ」といつて笑ひおるが不断のこと故、おれも頭の息子故内輪こきゅうものにしておいたが（※内輪話ということにして我慢していたが）、いろいろ馬鹿にしおる故、或とき木刀にておもふさまたたきちらし、あくたいをついて、なかしてやつた。〉（勝小吉『夢酔独言』、〈十一歳のころ〉、20p）

引用 6

〈親が呉た刀やらいろいろ質におゐて、相弟子へも（※昔の道場仲間）金を借り、いろいろして漸々三両二分ばかり出来たを持って、そのばんは吉原にいて、翌日車坂の井上のけいこ場へゆき、剣術の道具を一組かりて、直に東海道へかけ出した。……

おれがおもふには、是からは日本国をあるいて、なんぞあつたら切死をしようと思つて出たからは、なにもこわひことはなかつた。〉（同上、54 p f f）

28. 剣客、剣豪の夢と武士のデラシネ化

- 剣客の顕在化は、戦国末期、江戸初期から（宮本武蔵他）
- マクロの現象としての武士の農村離脱と連動
（開拓武士団の消滅、国人、郷士の周縁化）
- デラシネ化 → 浪人 ⇄ デラシネ化 → 仕官再就職の二極分化
- 〈巖流島の決闘〉も剣術師範としての就職運動がらみであった
- 幕末の第三のオプション → 道場主としての自立
- 剣の職能性に目覚めた下士、上昇志向の農民の需要の存在が可能にした
- それ自体、貨幣経済の拡充と不可分の関係にある
（下士は負け組、農民上層は勝ち組、道場主も貨幣経済の中で生きている）
- 道場主のオプションができたことは、志士たちにとっても大きな意味を持った
- ハブとしての活用のみならず、〈剣で生きる〉道を視野に入れることで、活動の自由度が増した

29. 幕末の〈喧嘩〉の階級混濁性、ハブ機能

- 用人を〈師匠〉として喧嘩の修業
- 喧嘩遊びによる階級混濁
- 適塾時代の福沢諭吉も喧嘩遊びにあけくれた（引用7）
- 無階級化の解放感 → 〈ええじゃないか〉に類似
- 喧嘩の効用 → 器量を測る（引用8）
- 閉塞状況の生んだ独特の社会性

引用 7

〈それから時としてはこういうこともあった。その乱暴さ加減は今人の思い寄らぬことだ。警察がなかったから、いわば何でも勝手次第である。元来大阪の町人は極めて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬が出て来て滅茶苦茶にしてしまうが、大阪では野次馬はとて出で来ない。夏のことで夕方飯を食ってぶらぶら出て行く。申し合わせをして市中で大喧嘩の真似をする。お互いに痛くないように大層な剣幕で大きな声で怒鳴って掴み合い打ち合うだろう。そうすると、その辺の店はバタバタ片付けて戸を締めてしもうて寂りとな

る。喧嘩といったところが、ただそれだけのことで、外に意味はない。) (『福翁自伝』(緒方の塾風)、69p)

引用8

〈ある日吉原へ俄(※にわか踊り)を見にいったばん、馬道で喧嘩をして見せたら、金十郎はこはがった。金十郎は国ではあばれものだといいいしが、江戸へきてはつまらぬ男であつた。〉(『夢酔独言』、97pf)

30. 『夢酔独言』の文体の独自性 → 近代的言文一致文の先駆

- 家訓独言の屈折 → 江戸下町言葉による独白のアイロニー(引用9)
- 農本的本能の発現(引用10)
- 下情を知ることの大切さ(引用11)
- 反面教師の自分(引用12)
- 個性的な人生知(引用13) → 階級混淆的
- 反省と屈折(引用14)
- 太平の世の余計者(引用15)
- 発話の多声化、多元化
- 〈屈折した悔悟者〉のタイプ(ドストエフスキイ)

引用9

〈おれのよふの子供ができたならば(※自分に自分のような子供がいたならば)、なかなか此^{このらく}楽は出来まいとおもふ。是もふしぎだ。神仏には捨てられぬ身とおもふ。孫や其子はよくよく義邦(海舟)の通りにして、子々孫々のさかへるよふに、こころがけるがいいぜ。〉(同上、6p)

引用10

〈無益の友は交るべからず。多言をいふ事なかれ。目上の仁(※人)は尊敬すべし。万事内輪にして慎み、祖先をまつりてけがすべからず。勤は半時はやく出づべし(※勤は一生もたない人だった)。文武をもつて農事とおもふべし。〉(同上)

引用11

〈農事をもすべし(※これは実際の農事のこと)。百姓の情を知る。世間の人情に通達して、心におさめて外に出さず守るべし。〉(同上)

引用12

〈第一に利欲はたつべし。夢にも見る事なかれ。おれは多欲だから今の姿になった。是
が手本だ。〉(同上)

引用 1 3

〈家来はびんぼう人の子をつかうべし。年季たちたらば分げんの格にして片付けてやる
べし。〉(同上)

引用 1 4

〈おれはこれからはこの道を守る心だ。……けっして理外の道へいることなかれ。身を
立て、名をあげて、家をおこ(す)事がかんじんだ。たとへばおれを見ろよ。理外にはし
りて、人外じんがいのことばかりしたから、祖先より代々勤めつづめた家だが、おれがひとり勤め
なるから、家にきづを付けた(※無職人の強いコンプレックス)。是がなによりの手本だ
は。今となり、醒めていくら後悔をしたからとて、しかたがなる。〉(同上)

引用 1 5

〈恐おそれ多くも東照宮の御幼少の御事、数年の御難戦故に(※今川に人質となった時代が
あり、難しい戦いが続いた、そのおかげで)、かくの如くに泰平つづき、万事きかつ(※
飢えかつえること?)にうれぬわすれ、妻子をあん楽かんらくにすごし、且かつは先祖の勤苦おもいや
るべし。夫より子孫はふところ手をして、先祖の貰った高を取うけて、昔を忘れて美服を
き(※小吉は着道楽で身代を何度もつぶした)、美味をくらいおり、ろくの御奉公ごほうこうをも勤
めざるは、不忠不義不孝ならずや。ここを能よくおもって見ろ。今のつとめは畳の上の仕事だ
から、少しもきづかひ(※気遣い、心配)ないは。万一すべつてころぶくらいの事だ。〉

3 1. 勝小吉の屈折は時代の徴表であり、典型だった

- 閉塞状況の中での無駄なものがき、無駄な処世知
- 人為的強権下での人間的定位の分裂解体
- 統合と修復は勝海舟たちの世代の課題となる

(近代本論第十九回キーワード終わり)